

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	ままはぐいわき事業所（児発）		
○保護者評価実施期間	2026年 2月 1日		～ 2026年 2月 17日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 6
○従業者評価実施期間	2026年 2月 1日		～ 2026年 2月 17日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数) 8
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月 18日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	専門性の高い人員配置：お子さまの状態に合わせ、基準を上回るスタッフを配置することで、微細な体調変化や行動特性に即応できる体制を整えています。	情報の即時共有（朝のMTGの充実）：送迎や記録業務で多忙な夕方の時間帯を補完するため、毎朝のミーティングを強化しています。前日の振り返りを確実にし、その日の支援方針を全員で一致させてからお子さまを迎え入れています。	振り返り時間の捻出と効率化：記録業務のICT化やフローの見直しを行い、支援終了直後に短時間でも「多職種でのカンファレンス」ができる時間を生み出します。
2	個性性に配慮した環境づくり：集团の中でも広いスペースや2階のプレイルームを使い、お子さまが落ち着いて自分のペースで過ごせる「個別の居場所」を確保する意識を職員全員が共有しています。	発達段階に応じた環境構成：集中が必要な活動の際は、パーティションの活用や場所の選定を行い、視覚的な刺激をコントロールする工夫を行っています。	個別プログラムの深化：スペシャルニーズの高いお子さま一人ひとりの特性に合わせ、より微細なステップアップを目指した個別活動メニューを充実にまいります。
3	地域との草の根の交流：大規模な行事開催が難しい状況下でも、近隣のこども園との交流を通じて、お子さまが社会の一員として地域に理解を広げる機会を大切にしています。	アウトリーチ型の地域交流：施設内に招くリスク（感染症対策や環境変化）を考慮し、こちらから地域（こども園等）へ出向く形で、安全かつ効果的な社会参加を促しています。	「事業所見学」の相互実施：こども園の先生方に、一度事業所の様子や「医療的ケア」について見学してもらう機会を作ります。専門職同士が繋がることで、地域全体での見守り体制が強まります。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域交流の限定性：リスク管理を優先するあまり、地域住民を招くなどの積極的な交流機会が持てておらず、地域中での事業所の存在や障害特性への理解浸透が一部にとどまっている。	安全確保と交流の両立の難しさ：スペシャルニーズの高い利用者様の安全（感染症対策や事故防止）を最優先に考える結果、外部の人を招く行事に対して慎重になりすぎていた。	段階的な地域交流の拡大：「行事への招待」という形にこだわらず、活動の様子を伝える掲示物の作成や、現在の「こども園との交流」の頻度を高めるなど、リスクの低い方法から地域との接点を増やしていく。
2	保護者同士の交流機会の不足：日々の送迎時の会話は行っているものの、保護者同士が悩みや情報を共有できる「保護者会」や座談会の開催が十分ではない。	運営時間の制約と家庭の多忙さ：土日祝が休みであることや、医療的ケア児・重心児の家庭は日々のケアで多忙なため、保護者が集まる時間を設定することへのハードルが高い。	「親御さんのためのサロン」の開設と家族支援：「情報交換サロン」や茶話会を定期開催**する。同時に、きょうだい児も参加できるイベントを企画し、家族全体を支える体制を整える。
3	きょうだい児への支援の未着手：利用者本人への支援で手一杯となり、そのきょうだいが抱える葛藤やケアに対する配慮（きょうだい支援）まで手が回っていない。	専門知識とリソースの不足：きょうだい支援の重要性は認識しているが、具体的なプログラムのノウハウや、対応するための人員・時間の余裕が確保できていない。	「親御さんのためのサロン」の開設と家族支援：「情報交換サロン」や茶話会を定期開催**する。同時に、きょうだい児も参加できるイベントを企画し、家族全体を支える体制を整える。